日本百名山の花

八幡平

ハチマンタイアザミ

八幡平の平はもともと「岱」の意味と深田久弥が記しているように、八幡平は巨大な高原湿地帯である。又、五万分の一の地形図が最後に出来たブランク地帯と記しているように、かつては踏込む事も容易ではなかった。しかし、頂上近くを通る道路(アスピーテライン)が出来てから、久弥が「しかし八幡平の真価は、やはり高原逍遥にあるだろう。」と記すように、ハイキング的な山になった。夏は大小の沼巡り、冬はスキーと、山岳とは少し距離を置く山になった。深田久弥も又、この山にスキーで最初に訪れている。

筆者が最初に訪れたのは、二〇〇二年の初夏。全国のスミレ取材の途中、ウスバスミレ取材目的で登った。前日、秋田駒ヶ岳に登って、タカネスミレの大群生を撮影していた。山岳風景も素晴らしく、記憶に残る登山であった。しかし、八幡平では、緩やかで整備された登山道沿いに疎らにウスバスミレが咲いていたが、この時の山自体の印象は薄かった。

翌年、今度は日本産アザミの取材で七月下旬に向った。この山に新種候補ハチマンタイアザミがあるという門田裕一博士の助言で向ったのである。場所の特定はできていなかった。かなり無謀な山往きであった。

ところが、山頂駐車場から少し下った道路沿いで、見た事も無い凄みのある大きなアザミが目に飛込んできた。とっさに「あった」と叫んでいた。

このアザミの最大の特徴は、日本産アザミの中で最も花が粘るということ。小型の昆虫が粘液で捉えられ、ムシトリアザミとも呼ばれていたという。そして、花の色が赤黒く、地獄の釜を連想させる凄みがあった。帰り際、八幡平の名前を冠した花があるこの山を、何か誇らしいと思ったのである。